片恋

芥川龍之介

（一しょに大学を出た親しい友だちの一人に、ある夏の午後京浜電車（けいひんでんしゃ）の中で遇（あ）ったら、こんな話を聞かせられた。）

この間、社の用でＹへ行った時の話だ。向うで宴会を開いて、僕を招待（しょうだい）してくれた事がある。何しろＹの事だから、床の間には石版摺（せきばんず）りの乃木（のぎ）大将の掛物がかかっていて、その前に造花（ぞうか）の牡丹（ぼたん）が生けてあると云う体裁だがね。夕方から雨がふったのと、人数（にんず）も割に少かったのとで、思ったよりや感じがよかった。その上二階にも一組宴会があるらしかったが、これも幸いと土地がらに似ず騒がない。所が君、お酌人（しゃくにん）の中に

君も知っているだろう。僕らが昔よく飲みに行ったUの女中に、お徳って女がいた。鼻の低い、額のつまった、あすこ中での茶目だった奴さ。あいつが君、はいっているんだ。お座敷着で、お銚子を持って、ほかの朋輩なみに乙につんとすましてさ。始は僕も人ちがいかと思ったが、側へ来たのを見ると、お徳にちがいない。もの云う度に、顋をしゃくる癖も、昔の通りだ。――僕は実際無常を感じてしまったね。あれでも君、元は志村の岡惚れだったんじゃないか。

志村の大将、その時分は大真面目で、青木堂へ行っ

ちゃペパミントの小さな罎を買って来て、「甘いから飲んでごらん。」などと、やったものさ。酒も甘かったろうが、志村も甘かったよ。

そのお徳が、今じゃこんな所で商売をしているんだ。シカゴにいる志村が聞いたら、どんな心もちがするだろう。そう思って、声をかけようとしたが、遠慮した。——お徳の事だ。前には日本橋に居りましたくらいな事は、云っていないものじゃない。

すると、向うから声をかけた。「ずいぶんしばらくだわねえ。私がUにいる時分にお眼にかかった切りなんだから。あなたはちっともお変りにならない。」

なんて云う。――お徳の奴め、もう来た時から酔っていたんだ。

が、いくら酔っていても、久しぶりじゃあるし、志村の一件があるもんだから、大（おおい）に話がもてたろう。すると君、ほかの連中が気を廻わすのを義理だと心得た顔色で、わいわい騒ぎ立てたんだ。何しろ主人役が音頭（おんどう）をとって、逐一白状に及ばない中は、席を立たせないと云うんだから、始末が悪い。そこで、僕は志村のペパミントの話をして、「これは私の親友に臂（ひじ）を食わせた女です。」――莫迦莫迦（ばかばか）しいが、そう云った。主人役がもう年配でね。僕は始から、叔父さんにつれら

れて、お茶屋へ上ったと云う格だったんだ。
すると、その臂と云うんで、またどっと来たじゃないか。ほかの芸者まで一しょになって、お徳のやつをひやかしたんだ。

ところが、お徳こと福竜のやつが、承知しない。――福竜がよかったろう。八犬伝の竜の講釈の中に、「優楽自在なるを福竜と名づけたり」と云う所がある。それがこの福竜は、大に優楽不自在なんだから可笑(おか)しい。もっともこれは余計な話だがね。――その承知しない云い草が、また大に論理的(ロジカル)なんだ。「志村さんが私にお惚れになったって、私の方でも惚れなければならな

いと云う義務はござんすまい。」さ。

それから、まだあるんだ。「それがそうでなかったら、私だって、とうの昔にもっと好い月日があったんです。」

それが、所謂片恋の悲しみなんだそうだ。そうしてその揚句に例（エキザンプル）でも挙げる気だったんだろう。お徳のやつめ、妙なのろけを始めたんだ。君に聞いて貰おうと思うのはそののろけ話さ。どうせのろけだから、面白い事はない。

あれは不思議だね。夢の話と色恋の話くらい、聞いていてつまらないものはない。

（そこで自分は、「それは当人以外に、面白さが通じないからだよ。」と云った。「じゃ小説に書くのにも、夢と色恋とはむずかしい訳だね。」「少くとも夢なんぞは感覚的なだけに、なおそうらしいね。小説の中に出て来る夢で、ほんとうの夢らしいのはほとんど一つもないくらいだ。」「だが、恋愛小説の傑作は沢山あるじゃないか。」「それだけまた、後世にのこらなかった愚作の数も、思いやられると云うものさ。」）

そう話がわかっていれば、大に心づよい。どうせこれもその愚作中の愚作だよ。何しろお徳の口吻を真似ると、「まあ私の片恋って云うようなもの」なんだから

ね。精々そのつもりで、聞いてくれ給え。

お徳の惚れた男と云うのは、役者でね。あいつがまだ浅草田原町（たわらまち）の親の家にいた時分に、公園で見初（みそ）めたんだそうだ。こう云うと、君は宮戸座（みやとざ）か常盤座（ときわざ）の馬の足だと思うだろう。ところがそうじゃない。そもそも、日本人だと思うのが間違いなんだ。毛唐（けとう）の役者でね。何でも半道（はんどう）だと云うんだから、笑わせる。

その癖、お徳はその男の名前も知らなければ、居所（いどころ）も知らない。それ所か、国籍さえわからないんだ。女房持か、独り者か――そんな事は勿論、尋（き）くだけ、野暮（やぼ）さ。可笑しいだろう。いくら片恋だって、あんま

り莫迦(ばか)げている。僕たちが若竹へ通った時分だって、よしんば語り物は知らなかろうが、先方は日本人で、芸名昇菊(しょうぎく)くらいな事は心得ていたもんだ。――そう云って、僕がからかったら、お徳の奴、むきになって、「そりゃ私だって、知りたかったんです。だけど、わからないんだから、仕方がないじゃありませんか。何(なん)しろ幕の上で遇うだけなんですもの。」と云う。

幕の上では、妙だよ。幕の中でと云うなら、わかっているがね。そこでいろいろ聞いて見ると、その恋人なるものは、活動写真に映る西洋の曾我(そが)の家(や)なんだそうだ。これには、僕も驚いたよ。成程(なるほど)幕の上でには、

ちがいない。

ほかの連中は、悪い落(おち)だと思ったらしい。中には、

「へん、いやにおひゃらかしやがる。」なんて云った人もある。船着だから、人気(にんき)が荒いんだ。が、見たところ、どうもお徳が嘘をついているとも思われない。もっとも眼は大分(だいぶ)とろんこだったがね。

「毎日行きたくっても、そうはお小遣(こづか)いがつづかないでしょう。だから私、やっと一週に一ぺんずつ行って見たんです。」——これはいいが、その後(あと)が振っている。

「一度なんか、阿母(おっか)さんにねだってやっとやって貰うと、満員で横の隅の所にしか、はいれないんでしょう。そ

うすると、折角その人の顔が映っても、妙に平べったくしか見えないんでしょう。私、かなしくって、かなしくって。」――前掛（まえかけ）を顔へあてて、泣いたって云うんだがね。そりゃ恋人の顔が、幕なりにぺちゃんこに見えちゃ、かなしかろうさ。これには、僕も同情したよ。

「何でも、十二三度その人がちがった役をするのを見たんです。顔の長い、瘦せた、髯（ひげ）のある人でした。大抵黒い、あなたの着ていらっしゃるような服を着ていましたっけ。」――僕は、モオニングだったんだ。さっきで懲（こ）りているから、機先を制して、「似ていやしないか。」って云うと、すまして、「もっといい男」さ。「もっ

といい男」はきびしいじゃないか。

「何しろあなた、幕の上で遇うだけなんでしょう。向うが生身の人なら、語をかけるとか、眼で心意気を知らせるとか出来るんですが、そんな事をしたって、写真じゃね。」おまけに活動写真なんだ。肌身はなさずとも、行かなかった訳さ。「思い思われるって云いますがね。思われない人だって、思われるようにはしむけられるんでしょう。志村さんにしたって、私によく青いお酒を持って来ちゃくだすった。それが私のは、思われるようにしむける事も出来ないんです。ずいぶん因果じゃありませんか。」一々御尤もだ。こいつには、

可笑（おか）しい中でも、つまされたよ。

「それから芸者になってからも、お客様をつれ出しちゃよく活動を見に行ったんですが、どうした訳か、ぱったりその人が写真に出てこなくなってしまったんです。いつ行って見ても、「名金（めいきん）」だの「ジゴマ」だのって、見たくも無いものばかりやっているじゃありませんか。しまいには私も、これはもう縁がないもんだとさっぱりあきらめてしまったんです。それがあなた………」

ほかの連中が相手にならないもんだから、お徳は僕一人をつかまえて、しゃべっているんだ。それも半分

泣き声でさ。
「それがあなた、この土地へ来て始めて活動へ行った晩に、何年ぶりかでその人が写真に出て来たじゃありませんか。——どこか西洋の町なんでしょう。こう敷石があって、まん中に何だか梧桐みたいな木が立っているんです。両側はずっと西洋館でしてね。ただ、写真が古いせいか、一体に夕方みたいにうすぼんやり黄いろくって、その家や木がみんな妙にぶるぶるふるえていて——そりゃさびしい景色なんです。そこへ、小さな犬を一匹つれて、その人があなた煙草をふかしながら、出て来ました。やっぱり黒い服を着て、杖をつ

いて、ちっとも私が子供だった時と変っちゃいません……」

ざっと十年ぶりで、恋人にめぐり遇ったんだ。向うは写真だから、変らなかろうが、こっちはお徳が福竜になっている。そう思えば、可哀そうだよ。

「そうして、その木の所で、ちょいと立止って、こっちを向いて、帽子をとりながら、笑うんです。それが私に挨拶をするように見えるじゃありませんか。名前を知ってりゃ呼びたかった……」

呼んで見給え。気ちがいだと思われる。いくらYだって、まだ活動写真に惚（ほ）れた芸者はいなかろう。

「そうすると、向うから、小さな女異人が一人歩いて来て、その人にかじりつくんです。弁士の話じゃ、これがその人の情婦（いろおんな）なんですとさ。年をとっている癖に、大きな鳥の羽根なんぞを帽子につけて、いやらしいったらないいんでしょう。」

お徳は妬（や）けたんだ。それも写真にじゃないか。

（ここまで話すと、電車が品川へ来た。自分は新橋で下りる体（からだ）である。それを知っている友だちは、語り完（おわ）らない事を虞（おそ）れるように、時々眼を窓の外へ投げながら、やや慌しい口調で、話しつづけた。）

それから、写真はいろいろな事があって、結局その

男が巡査につかまる所でおしまいになるんだそうだ。何をしてつかまるんだか、お徳は詳しく話してくれたんだが、生憎今じゃ覚えていない。

「大ぜいよってたかって、その人を縛ってしまったんです。いいえ、その時はもうさっきの往来じゃありません。西洋の居酒屋か何かなんでしょう。お酒の罎がずうっとならんでいて、すみの方には大きな鸚鵡の籠が一つ吊下げてあるんです。それが夜の所だと見えて、どこもかしこも一面に青くなっていました。その青い中で――私はその人の泣きそうな顔をその青い中で見たんです。あなただって見れば、きっとかなしくなっ

たわ。眼に涙をためて、口を半分ばかりあいて……」

そうしたら、呼笛（よびこ）が鳴って、写真が消えてしまったんだ。あとは白い幕ばかりさ。お徳の奴の文句が好（い）い、――「みんな消えてしまったんです。消えて儚（はかな）くなりにけりか。どうせ何でもそうしたもんね。」

これだけ聞くと、大に悟っているらしいが、お徳は泣き笑いをしながら、僕にいや味でも云うような調子で、こう云うんだ。あいつは悪くすると君、ヒステリイだぜ。

だが、ヒステリイにしても、いやに真剣な所があったっけ。事によると、写真に惚れたと云うのは作り話

で、ほんとうは誰か我々の連中に片恋をした事があるのかも知れない。

（二人の乗っていた電車は、この時、薄暮（はくぼ）の新橋停車場へ着いた。）

（大正六年九月十七日）

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房
１９８６（昭和61）年10月28日第１刷発行
１９９６年（平成８）７月15日第11刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９８年12月７日公開
２００４年３月10日修正

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。